

富岡製糸場や片倉シルク記念館では古い機械が展示されているが、稼働中の機械を見るには、碓氷製糸工場を見学する必要がある。見学ツアーはカイコの繭が運ばれてくる工場の上層階から始まる。繭は日本全国から運ばれる。繭の清算は徐々に縮小傾向にあり、工場は廃業した製糸工場の袋を展示している。同じフロアには英語と日本語の両方で巻上げプロセスのステップを簡単に説明している情報版がある。一つ下の階に降りると、参加者は繭が乾燥され、貯蔵に移動した場所を見ることができ。隣接する建物は繭を貯蔵しており、ベルトコンベアは巻き取りの時がくると繭を選別室に運ぶ。自動化されていないいくつかのプロセスの1つに、繭の選別がある。経験豊富な工場労働者は、傷、穴のあいた繭、または玉繭をすばやく素早く取り除く。

繭は軟化するためにボイラーに向かい、自動巻き取り機に向かいます。機械は自動的に繭からフィラメントを引き出し、それを糸に巻き取ります。繭の品質によっては、スレッドが引っ掛かるか壊れてしまう。その場合、労働者は、糸を固定して巻き取りプロセスを再開させる。フランスから日本にもたらされた最初の蒸気動力モデルは多くの人力を必要とした。2台の製紙機は、一人の「工女」によって注意深く見守られなければならなかった。しかし、現代の機械では、一人だけで一度に120台以上の製紙機を監視している。

破損した繭、セリシン、“キビソ”、そして蛹さえもすべて処理され販売されているので、無駄はほとんどない。ツアーの終わりには、さまざまな種類のシルクが展示されていますが、購入することもできる。